

を砧の如にして接なり、大木一本をほれば砧木數十本を得べし、總て根へ接時は玄ばらく置て、土中の水氣をかわかして接べし、又珍き木など、但一本にして外に砧とする木もなければ、其木の根を切取て砧となして接べし、臘梅連翹などは根より芽を多生するゆへ、常の砧木の如にしてはつぎ悪し、根を砧にして接べし、

〔農業全書九〕接木之法

木を接法様々あり、先臺木を兼て子種みのたねにし置きたるがよし、山野より俄にほり取たるは、第一は細根多く付すして皮めもあらく生付かぬ物なり、假令つきても盛長をそく、後々年をへては、子うへのだい木に接たるには劣れり、山林より取たりとも、根に疵なきを用ゆべし、其ふとさ凡やりの柄ほどなるを中分とすべし、梨柿桃栗梅櫻の類は、大きい木に中つぎにしたるもつく物なり、柑橘の類は高くはつぐべからず、だい木の大小をよく見合せ、ふとき程高かるべし、されど高くとも一尺ばかりには過べからず、又下ひきくとも四五寸に越べからず、下きは活やすけれども、臺木の皮切口を包む事遅し、小き木高ければ、木の精上りかねて、穗に及ぶ生氣乏しきゆへ、枯る、事あり、四五寸一尺の間を中分とすべし、齒の細かなる能きる、鋸にて引きり、切口を見ればまさきめあり、其卷目の遠き方に穗を付る物なれば、其方を少高く削り、接穗の長さ三四寸、本の方を一寸餘、肉を三分一ほどかけてそぎ、返し刀少し玄こゑて口にふくみ、口中の生氣を借り、扱だい木の穗を付る所を、穗のそぎたる分寸に合せ、肉の内に少かけて皮を切ひらき、小刀のきりたる肌をむらなくして穗をさし入竹の皮か、おもとの葉、古油紙にても、一重まき、其上をあら苧か打わら、又は葛かつらの皮目にて、手心にて、玄かと一寸四五分も卷て、其上を又雨露もとをらず、蟻も入ざるやうに稠しく包み卷て、日おほひはおもとか竹の皮にて、日かけの方よりは、穗のさき見る様にあけて包み置、廻りを鷄犬もさはらぬやうに竹をさしかこひ、わらかこもにて包み、上を